日韓青年親善交流のつどい
感想文

この世界の共通言語は「言葉」だけではない

名前：伊藤史哉

■参加目的

本プログラムの参加理由は、「近くて遠い存在」を「近くて近い存在」に変えるためだ。私にとって韓国は「距離は近いが、気持ち的に遠い国」だった。韓国に訪問したのは、幼い時に１回だけ。現在の韓国について知るすべは、マスメディアしかなかった。本プログラムを通じ、参加青年と交流して相手国に関する理解を深め、両国の未来に貢献する契機にしたいと考えていた。

■学んだこと

本プログラムに参加するまで私を悩ませたのが「言葉」だ。本プログラムの共通言語は、日本語および韓国語。私は韓国語が一切話せないため、日本語も英語もあまり得意ではない韓国青年とは言語を通じて対話できない。どのように相手国青年とコミュニケーションを取ればいいのか困惑していた。この難題に突破口を開いてくれたのが「日韓文化交流夕べ」。このプログラムは、両国の青年が各国の踊り・歌など披露して自国文化を相手国に伝える場である。韓国青年は自国文化の表現に加え、日本で流行っている踊りなども披露。その時、相手国を喜ばせようとする配慮を姿勢で表すことで、相手とコミュニケーションを図ることができる、『共通言語は「言葉」だけではない』と気付かされた。各国の発表終了後に、短時間ではあるが、相手国について調べて通訳を介してコミュニケーションを取ったり、身振り手振りで自分の想いを伝えるよう試みた。相手に対してどこまで自分の想いを伝えられたかは分からないが、自分の中で「韓国」に一歩だけ近づけたように感じた。

■最後に

2 泊 3 日という短期間だったが、あれだけ遠くに感じていた存在が少しだけ近く感じられるようになった。今後、未熟な私が起こせる１つ１つのアクションは、ごく小さなものかもしれない。だからこそ、今回出会った青年達と共に、相互理解をさらに深め、両国の未来の一翼を担っていきたいと考えている。まずは自分にできる小さくて大きな一歩を踏み出したい。

日韓友好の架け橋への第一歩

名前　上杉知香

今回日本・韓国青年親善交流のつどいに参加し、日本参加青年と韓国参加青年との交流を通して、たくさんの学びと発見があったと感じています。また改めて、国際交流が好きな事を再発見出来た３日間でした。
大勢の外国人の中に混ざって交流をするのは久しぶりの事で緊張もしましたし、韓国語が出来ず、年齢も他の参加青年より上になる私にとっては馴染めるのかとても不安でした。
日本参加青年も韓国参加青年もみんな積極的で気さくに話をしてくれたので、緊張も不安もすぐに無くなりました。
プログラム１日目はアイスブレイクから始まり、日韓文化交流の夕べ、お菓子パーティーがありました。
アイスブレイクで特に印象に残っているのは、チーム対抗のジェスチャーゲームです。両国でのジェスチャーの違いはあるのかとても気になっていましたが、言葉は違っても解り合える、通じ合えるんだなと思いましたし、とても面白かったです。
日韓文化交流の夕べでは、k-pop のダンスを披露する事になっていたのですが、この日まで会った事のない、文章でしか会話をした事がない人達とのグループでの発表でした。その日に初めて出会い、振り付けを合わせるのも初めてで、練習時間も短く、とても不安でした。「アンケートでダンスするって言わなければ良かったかな…」という人もいました。ですが、終わった後は「やっぱり参加して、みんなで達成出来て良かった！」とみんなで喜びました。本番では韓国青年が合いの手を入れて盛り上げてくれたのでとても嬉しかったです。なかなか経験できない素敵な思い出を作る事ができたと思います。
プログラム２日目はディスカッション、文化体験、絆を深める運動会や共同制作と様々な活動を行いました。
ディスカッションでは、「恋愛・結婚」について話し合いをしたのですが、驚いた事に日本と韓国とで考え方などにあまり差がありませんでした。同年代同士では国際恋愛や国際結婚に対する考え方や意識が似ていて、話し合いをしていてとても楽しかったですし、違う国だけど似ているところもあってとても嬉しかったです。
文化体験では日本と韓国の伝統的な遊びなどを体験できるブースが準備されていました。
韓国青年たちが準備してくれたブースでは、韓国の伝統衣装である韓服を着させてもらったり、韓国の昔遊びを体験しました。日本側のブースでは金魚すくいやけん玉、福笑いがあり、日本青年も韓国青年もお互いの文化に触れながら、とても楽しい時間を過ごす事ができたと思います。
絆を深める運動会は想像していたものより本格的な運動会で、学生の頃に戻った気持ちで楽しませて頂きました。玉（新聞紙）入れや大縄跳び、宅配便リレーなどチームみんなで

協力し合いながら楽しめる競技が盛りだくさんでした。私たちのチームの順位は残念ながら下から数えた方が早いという結果に終わりましたが、それも素敵な思い出になりましたし、何よりチーム一丸となって頑張った事に意味があると思います。その名の通りより一層絆を深める事が出来たと思います。
3 日間を通して、日本参加青年とも韓国参加青年とも仲良くなる事ができ、素敵な友情を結ぶ事が出来たと感じております。何かのご縁で巡り会った素敵な方々なので、これかも連絡を取り合い、日韓の友好を更に深めていけたらいいなと思います。また、そのように思えるたくさんの友達に出会えた事に感謝します。

私の夏の思い出　2泊3日

名前　小沢綾

私が今回の日韓青年親善交流を知ったのは、大学の国際交流センターの掲示板でした。今年大学に入学して一人暮らしや、慣れない学校生活を過ごす中でもう少し自分でアクティブに行動したい、夏休みだからこそできることはないかと思い参加することに決めました。もともと、日韓交流には関心が強くあり、地元で行われていた日韓交流会にもよく参加していました。韓国に興味があり、自分の韓国語がどの程度通用するのかとも思い申し込みを決めました。実際に私が参加したのは埼玉で行われた2泊3日のプログラムでした。友達と一緒に参加できたのでとてもウキウキな気持ちで参加しましたが、いざ韓国青年たちと対面したときに緊張でなかなか言葉をかけられなく、友達とずっと一緒にいてしまい今考えてみたら、その時間が勿体無かったと思ってしまいます。しかし、アイスブレイクの時間や食事の時間などを一緒に過ごしていく中で、話したことがない人がいないくらいに韓国青年とはもちろん日本の青年とも仲良くなれたと思っています。私が思ったことですが、日本人より韓国人のほうが初対面の人と仲良くなるスピードが速かったなと思いました。それはこれから私が身に着けないといけないことでもあると思いました。私が今回の2泊3日のプログラムで一番楽しかったのは初日の最後のお菓子パーティーです。私たちがお菓子を食べながら、自由に会話もできて本当に楽しかったです。12時までだったのに、時間がほんとうに早く過ぎていくと感じました。3日間も一緒に行動していたので最後のお別れは本当に悲しくなりました。最終日にみんなで見た、スライドショーがとても感動しました。みんなの笑顔や真剣な表情が一つ一つ流れて行って、一生懸命さはやはり世界共通なんだなと実感しました。今回の日韓青年親善交流のプログラムに参加して、私の大学1年初めての夏休みの最高の思い出の1ページとなりました。企画してくださった方々、仲良くしてくださった方々すべてに感謝したいです。そして人脈、と思いやりの大切さを再確認できた2泊3日でした。また、機会があれば参加したいです。ありがとうございました。

沢山の出会いと愛に感謝

川名彩世

私がこのつどいに参加したいと思ったのは、たとえ国同士が問題を抱えていたとしても、その中に会って触れ合いたいと思っている人が日本側にも韓国側にもいて、そうして実現する人と人のつながりが大事なのではないだろうかと思ったからだ。彼らと向かい合い目を見てお互いの思いを伝え合いたいと思った。また、自分が 9 月の韓国派遣で行くだけではなく、私もぜひ韓国青年を日本で歓迎したいと思った。

今回初めてみんなで寝食を共にする日韓交流に参加して、言語の壁を越えて沢山の笑顔が見られ、一つになれたと思うし心を通わす友達も多く出来た。その中でも一番印象に残っているのは日韓交流の夕べ。韓国青年のパフォーマンスは流行のダンスや、伝統文化であるテコンドーをリメイクしたものだったり、最後のみんなで書道のように日韓の縁という文字を書いたりとバラエティーに富んだもので沢山の愛と気持ちが伝わってきた。私たちが発表している間もスマートフォンのライトを使っての歓声や、一緒に歌を歌ってくれたこと、こんなに温かい空間があるのだろうかと思った。

私はつどい後の東京視察、自由時間にも会うことが出来て、「渋谷のスクランブル交差点は本当にすごいね！」「ここのラーメンおいしい！」と素直に嬉しそうに言ってくれる彼女たちに感謝でいっぱいになったし、普段何気なく歩いている東京を自分自身も新たに発見することもあり、この夏忘れられないひと時を過ごすことが出来た。交流は言語以上に心で伝え合うと言いはするが、自分は韓国語がほとんど話すことが出来ず、やはり韓国語をもっと勉強して色々なことを聞きたいし伝えたかったと思うのは心残りである。また韓国青年だけでなく、事業に参加した先輩方とも一緒に活動出来たので、韓国派遣に向けてより一層明確なビジョンがたてられた。

つどいで得た私の縁

名前　木村　朝香

つどいは、大事なことに気づかせてもらえた、非常に貴重な経験となりました。私は元々韓国文化について興味がありましたが、今まで韓国青年と実際に会話したりしたことはなく、今回のつどいが私にとって初めての韓国青年との交流でした。

“たくさん話し仲良くなり、一杯韓国の友人を作ろう！”そう安易に考えていた私にとって大きく残ったのは悔しい思いでした。私は、簡単な韓国語しかできません。韓国青年を前にし、たくさん話したい気持ちはあっても、“言いたい事が伝わらないかもしれない”という気持ちが先に出て勇気を出せず、自分から積極的に話しかけられませんでした。周りで韓国語を使いどんどん仲を深めている人達に圧倒され、受け身の姿勢になっていました。つどいが終わり、この自分にとても反省し、後悔しました。しかし、この経験は私にとって、非常に重要な機会となりました。私は、つどいの後に控えていた韓国青年の都内視察のお手伝いをする事になっており、韓国青年と一緒に新大久保を散策しました。つどいの悔しい経験を引きずっていた私は、“またもどかしい思いをするのではないか”と、後ろ向きになっていました。しかし、“つどいでは消極的な姿勢で後悔した。今回は自分から積極的に楽しんでいこう！”と気持ちを前向きに変え、臨みました。視察中は、伝わるか伝わらないかは気にせず、英語や韓国語、日本語を使って自分からたくさん話しかけました。すると、韓国青年と自然と話が弾み、とても楽しんでいる自分に気づけました。このつどいがなければ、積極性や自分から楽しんでいく大事さに気づけませんでした。

また、このつどいでは大切な縁を作れました。韓国青年との別れの際、ルームメイトだった子が、「ありがとう！泣きそうだよ！」と言ってくれた時は、この目の前の一人一人と縁を作れたことが、本当に幸せだと感じました。今回つくれたこの縁に感謝し、ずっと大事にしていきます。

つどいを終えて

名前：吉地　沙耶

２泊３日のつどいを終えてから早１ヶ月が経とうとしています。私は昨年の日本・韓国青年親善交流事業に参加し、より日韓についての理解を深めたい、そして日本と韓国の間に立ちたいという風に考えており、今回つどいに参加することによってより理解が深められるのではないかと考え応募しました。寝食を共にし、ディスカッションや文化発表を通して、日韓両国青年が心を通わせあうことで新たな一面、側面を知りたいと考えました。また昨年度、日本・韓国青年親善交流事業に参加した中で心に残った部分は韓国青年たちとの対話の時間が少なかったことでした。目の前にある課題に必死になり、交流をあまりできなかったという反省がありました。今回は、全力で目の前にいる全員とコミュニケーションをとり、仲を深めるというのが今回の目標でした。１日目から全力でみんなにぶつかりました。たくさんの人数の初対面の人と濃く関わるのは、昨年の派遣以来でしたが、名刺を切り札にたくさんの人と関わることができました。夜の日韓の文化発表をした時は、私たちの出し物を見て、とても喜んでくれている姿が目に入りました。その後の交流会では、私たちの出し物の真似をしてくれる子がいたり、褒めてくれたりとても嬉しかったです。出し物をきっかけに仲良くなった子もいました。２日目はメインのディスカッションでした。たくさんのメンバーと真剣に意見を出し合いました。韓国の人の意見をじかに聞くことができとても良い機会になりました。テーマが私たちに身近なものであったこともありとても白熱した良い議論になりました。用意してくださったたくさんのアクティビティーをきっかけにコミュニケーションをとることができました。今回のつどいを通して、さらなる理解を深めることができました。これからも日韓交流を続け、心からの交流をし、日韓の中間人になれるよう邁進したいと考えております。

つどいから見つけた目標

名前　久保寺香歩

今回のつどいを通して、私は３つの目標ができた。１つ目は、積極的に外国語を話すことだ。今回の交流で、韓国青年が話す日本語の流暢さに圧倒された。一方で、私は日本語に甘んじてしまっていた。彼らの、日本語を使って話そうとする意識の高さに、私も負けられないと思うとともに、まだまだ勉強不足であることを自覚させられた。今回の反省を踏まえて、次の機会では、韓国青年の姿勢を見習って、外国語の会話能力を上げたい。

２つ目は、自分の視点に疑問を持つことである。大学に入り、多角的な視点を養ってきたという自負があったが、ディスカッションでは打ちのめされた。私は、教育のテーマを担当したが、日韓における「教育格差」という言葉そのものの定義の認識にすら違いがあるとは、予想だにしなかった。しかし、同じディスカッションのメンバーが、この問題の所在について最初に指摘してくれたおかげで、このことに気づき、非常に勉強になった。今回のディスカッションは短い時間だったが、とても充実していて、様々なことを得られた良い機会だった。

最後は、このつどいで築いた友情を宝物にすることだ。上記の２つとは異なる内容だが、この３点目を１番大切にしたい。この縁を大切にすることこそ、今回の交流を活きたものにできるからだ。今回のつどいは、私にとって人生初の、同世代による国際交流だった。最初は非常に緊張したものの、私のような国際交流の初心者でも、気軽に参加しやすく、会話も楽しめる交流会だという印象を受けた。もちろん、韓国青年が、フレンドリーに接してくれただけでなく、実行委員の方が尽力してくださったおかげでもあるので、非常に感謝している。

韓国への理解を深めたいという思いで参加したこのつどいで、貴重な経験をさせてもらえたうえ、忘れられない思い出がたくさんできた。今回の日韓青年親善交流のつどいを原点に、これからも日韓交流に携わり、貢献したいと強く思う。

日韓青年親善交流のつどいを終えて

笹原基希

日韓青年親善交流のつどいは、３日間という短期のプログラムでしたが、内容の濃いあっという間の３日間でした。プログラムを通して一番印象的だったのは、韓国青年の日本への関心と意欲の高さです。韓国青年は日本語を話すことができる人が多く、アニメや料理など日本に関して日本人の私たちよりも詳しいのではないかと思ってしまうほどでした。また、知らないことに対して学ぼうとする意欲が強く、私自身にはまだ積極的に学ぶ姿勢が足りないということを自覚しました。韓国の貪欲な学習意欲は韓国留学中も目の当たりにし、今回のプログラムを通して今後私たちが見習わなければならないと感じました。

プログラムの中で一番印象深かったものは、「文化交流の集い」です。韓国青年の発表にとても感動しました。発表内容はすべて質が高く、とても練習してきたことがわかりました。また、日本で流行している芸を取り入れており、改めて日本への関心が高いことを感じました。それに対して、日本青年の発表は満足してもらえるほどのものではなかったと思います。準備する時間があまりなかったとはいえ、日本を代表しているという自覚が足りなかったと反省しています。韓国青年に日本を知ってもらう良い機会なので、そのために準備して、さらに良い物を見せたかったと感じました。

全体を通して、韓国青年と交流する機会に恵まれ、とても楽しかったです。夜はルームメイトの韓国青年と日韓関係について話し、お互いの国やそれぞれの考え方を知ることができました。互いの国で考え方に違いはあっても、関係を良くしたいという思いは一致していました。プログラムに参加した日韓の参加者が主体となって、何らかの形で日韓交流の機会を増やすことができれば、今後の日韓の友好関係を広く、深くすることができる可能性を感じたプログラムでした。

昨年度の派遣から今年度のつどいまで

名前　〆田祐奈

今年度の日韓青年親善交流のつどいに参加し、一番印象に残っていることは有志として昨年度の派遣メンバーと一緒に「ブルゾンちえみ」のパロディを披露したことである。もちろん、昨年度の派遣メンバーと再会を果たしたことの嬉しさや、韓国青年に喜んでもらえたという達成感もあったが、何よりも昨年度の派遣メンバーと限られた時間で準備をし、発表をやりきったことを通して、昨年度の派遣で築いたメンバーとの絆の深さや信頼関係を再認識できたことが一番嬉しく、また誇らしく思えたからだ。

昨年度、日韓青年親善交流のつどいへの参加を試みたが、期末考査中であったがために参加が難しかった。同じ派遣団のメンバーが昨年度のつどいに参加をし、経験したことを共有してくくれたときには、楽しそうに話す姿、韓国青年といち早く共に過ごした経験をとてもうらやましく感じていた。当時は、派遣参加前に参加することに意義があると自分自身勝手に思い込んでいたが、今回派遣後につどいに参加したことで、昨年には感じることができなかったことを改めて考え、感じることが出来たのではないかと思っている。また、派遣後に派遣メンバーと何かをするという機会がなかったので、そういった点では派遣後につどいに参加させていただくことができて本当に良かったと感じた。

このように特に感じた理由としては冒頭で述べたように、ちょうど一年後に同じプログラムで昨年度の派遣を通して得た経験や信頼関係を発揮できたことが一番大きいと考える。昨年、約 2 週間の間に多くの刺激を受けながら、意見を交わし、共に過ごしたことによって相手の能力やスキル、それに合わせ、またその中で自分がどのような立場で行動すればいいのかということを学んだ。それが故に、当日 30 分という限られた時間の中で、発表原稿、割り振り、立ち位置などを確認し、場を仕切る担当、準備をする担当、連絡をする担当と各自が役割を見つけ、動けたのだと考える。このような最高の仲間に出会えたプログラムで、一年後再び集まり、また何かを成し遂げることが出来たということは大変貴重な経験であり、この関係をこれからも続けていきたい。このように思える機会を作っていただけたことに感謝しています。ありがとうございました。

国際交流において大切なもの

名前　原　沙都子

私は韓国語が話せず、韓国青年とは私の拙い英語でコミュニケーションをとるしか方法がないという不安からつどいに参加するかどうかを締め切りギリギリまで悩んでいました。しかしながら、韓国の文化が好きな私は参加青年との交流を通してもっと韓国を身近に感じたい、知りたいというモチベーションから参加することを決めました。
一日目のアイスブレイクでは、飛び交う韓国語に圧倒されて残りの二、三日やっていけるのだろうかと不安になるほどでした。しかし、そこで話が分からないからといって上の空になってしまったら今回参加した理由と矛盾してしまうと思い、わからないながらも理解しようとする姿勢、相槌を心がけていました。すると少しずつ、みんなが話している表情や雰囲気からどのような思いを伝えようとしているのかが伝わってくるようになったのです。その後は、ゲームや文化交流、ディスカッションと続きましたが、最初に抱えていた気持ちの重さは全く感じなくなり、素の自分で楽しむことができるようになったのです。さらにお別れのときには、二日前に出会ったというのが考えられないくらい寂しい気持ちになってしまいました。

私はこのつどいに参加した今、国際交流において大切なのは言語だけではないということを言い切ることができます。もちろん交流において言葉の壁は大きなものです。しかしながら、お互いを理解しようとする気持ち、優しさ、笑顔（これが一番大切かもしれません）、この三つさえ備えていれば、どんな国の人とも「家族」になれます。大げさに聞こえるかもしれませんが私はこの三つのことを心にとめることで、本当に大切な仲間と出会うことができました。また、その存在は必ず「その国の言語を学びたい」「歴史、文化を知りたい」といった次のステップにつながります。そのため、今後つどいへの参加を不安に思い、迷っている人がいたら必ずその一歩を踏み出してほしいです。

最後になりましたが、つどいの実行委員の方々、推進センターの方々には本当に感謝しています。ありがとうございました。

日韓青年親善交流事業つどい参加を通して

名前　富士　伶奈

今回、日韓青年親善交流事業つどいに参加して学んだことは二つある。

一つは、実際に国籍、文化、言語が異なる韓国の方と二泊三日寝食を共にすることによって、育ってきた環境が違えども同じ人間であるということに深く気づいた。
このつどいを通して、今まで韓国人=また別の人間(差別的な意味ではない)、違う国に住んでる、日本人とはまた違う考えを持っている人たちという考えが自分の中にあったことに気づいた。しかし、一緒に生活をしてみると、基本的な考え、基本的な生活は日本人の私達と変わらないことが分かった。島国である日本という国に住んでると、外国人=また別の人という考えは、もしかしたら多くの人が持っているかもしれないということにも気づいた。実際に韓国人と一緒に生活した私たちだから気づいたことがあるから、それを友達や家族にも伝えて、日本人の持った誤解なども解いていくような人になりたい。

もう一つは、日本の魅力である。今回つどいに参加した韓国人派遣団は皆日本に関心を持っていた。どこが好きかと聞いたとき日本語が好きな人もいれ場、日本文化、マンガ文化、J-POP、日本ドラマ、アニメ、様々な理由で日本に関心を持っていた。その理由を聞きながら、日本人である私自身は日本語を作ったわけでもないし、アニメ、ドラマ、文化を作ってきた訳ではないけど、日本人として誇らしくなった。そこで同時に、そのような新たな日本文化を私が作り出すのは難しいかもしれないけど、その日本らしさを外国人に伝えることは日本人の私にしかできない、と感じた。これからも国際交流を通して日本人として外国人に日本の素晴らしさを伝える人になっていきたい。

今回、日韓青年親善交流事業つどいに参加することによって自分に新たな気付きを与えてくれた皆様に本当に感謝します。また、このような機会があるならば、自分自身の成長、新たな気付きを得るためにも参加したい。

日韓交流会を終えて

名前　吉藤　実里

日韓交流会を終えて、自分がそこで得たことや考えたことについて述べる。まず、私はこれほど多くの韓国人と交流したことがなかったのでとても新鮮だった。大学で韓国語の授業や韓国文化の授業を受けていて大学でも韓国人の友達がいるが、自分と歳の近い学生たちと韓国文化や日本文化について話す機会はあまりなかった。

次に私が特に印象に残ったことについて述べる。まず、一日目の文化紹介である。韓国青年団たちの舞台を見て、とても完成度が高く、彼らが時間をかけて一生懸命準備したことが伝わって来た。最後の手に絵の具をつけて“韓国、日本、縁”と書いた作品はとても感動して何枚も写真を撮ってしまった。彼らが一つとなって団結していることを感じたし、また日本人ととても交流したいという思いが伝わって来た。二点目は二日目のディスカッションである。ディスカッションでは、韓国と日本の学習に関して話し合い、自分たちの中高時代について一人一人話したことが印象的だった。韓国はとても勉強する国というのは聞いていたが、音楽や美術、体育の授業もなく、部活もあまりしないというのは初めて聞いた。また、学校によっては好きなことができる自由なところで中高生活はとても楽しかったと話している人もいた。最後に、一番この交流会でよかったことは韓国人の子と寝泊まりを共にできた事だった。一緒の部屋だった韓国人の子が
とても優しい子だったので、話しやすく、 日本と韓国の文化やドラマ、音楽、化粧などについてお互いに夜遅くまで話した。来年は日本に留学しようと考えていると聞いたので、留学しに来た時には連絡を取って一緒に観光したいと思う。

以上のように、私はこの交流会で自分と歳が近い多くの韓国人と話すことと、またこの交流会の後も関係性が続くような韓国人の友達を作ることができたので、今回の交流会のテーマである「縁」を成すことができたと思う。

交流の輪

名前　日下部　帆南

私は昨年度の日本韓国青年親善交流事業に参加して、初めて韓国人の友達ができ、初めて国際交流の楽しさを知った。韓国人、日本人という枠に縛らず、先入観を持たずに同じ一人の人間として向き合うことで、その人自身が見えてくる。純粋に好きで続けてきた韓国語も、相手に気持ちを伝えたいから、相手をもっと知りたいから学ぶ、必要不可欠なツールなのだ。そのように気付いた去年、国際交流に対するハードルが低くなり、一度で終わりでなく、より深く長くたくさんの交流活動をしたいと感じた。そのためには韓国に対する知識、韓国語能力をもっと身につける必要があると思い、韓国留学を決意した。そして留学する前に日本で何か新しい挑戦ができたらと思い、つどいの実行委員に応募したのが参加のきっかけである。自分の人生のターニングポイントになった事業にもう一度関わり、少しでも貢献したいという思いもあった。

このつどいへの参加が挑戦であるというのは、初めて日韓交流の場を創り、提供する立場となるという点である。どのような企画をしたら参加者の緊張を解せるか、国際交流が初めての参加者、事業既参加者、今年の派遣事業参加者など参加者の経験の違いがある中で、皆を楽しませ、感動させ、ワクワクさせるにはどうすればいいか。経験豊富な実行委員の皆と企画を一から考え、詰めていく過程は想像以上に難しかった。しかし参加者から「日韓交流がこんなに楽しいとは思わなかった。」「派遣の一番の思い出になった。」「将来やりたいことの決心がついた。」という言葉を聞くことがあった。その言葉を聞き、ホッとするとともに、自分が関わった場が誰かの人生を変える瞬間になったということ、一年前に自分が感じたように交流の楽しさに気づいた人がいるということが何よりやりがいを感じた瞬間であった。交流の輪を広げるというのは自分が交流した範囲の中で完結するのではなく、誰かが繋げてくれた縁をまた他の縁に繋げ、バトンタッチしていくことでより意味のあるものになるのだと改めて感じた。私自身もこのつどいという一つの点をまた次のステップにつなげ、一回では終わらない日韓交流の道を築いていきたい。

日韓青年親善交流のつどいに参加して

名前 荒井 奏絵

７月 29 日～31 日に行われた 2017 年度･日韓青年親善交流のつどいに参加した。私が集いに参加した理由は３つある。まず条件的な部分で、韓国に留学中の私が日本に戻る期間にちょうど行われたこと。そして２つ目に去年は派遣交流事業の参加団員だったにも関わらず、つどいにも行けず、派遣日程でも交流会の日程が短く(通常:２泊３日、昨年:１泊２日)、十分に交流が出来なかったという心残りがあったこと。そして３つ目は、単純に今年の韓国派遣団に会ってみたいという好奇心からだった。

参加して感じたことは、大きく２つある。まず「派遣交流事業に参加出来て、本当によかったな」ということだった。韓国人青年の姿を通し、昨年の私たちの姿が思い出され、派遣がとても懐かしかった。派遣日程中は大変なこともたくさんあったが、終わって１年たった今、派遣されたことに対する感謝、そして共に研修・派遣の日程をこなした友人たちへの愛が大きくなったことを実感した。恐らくこれからもずっと「韓国」という共通関心事項を通して、「ずっとずっと繋がっていくのだろうな」と感じ、感慨深かった。

２つ目に感じたことは、私はもう私だけが交流する段階から、さらに一歩踏み込んで交流の場を提供する側の姿勢になっているのではないかということだった。私はこれまで様々な日韓交流事業に参加してきた。最初はそれこそ言葉も出来なくて、どう歩み寄るかもわからなかったが、回数を重ねながら韓国・日本に対する理解を深め、お互いを知ろうとする交流の仕方も習得した。だが今回つどいで気づいたのは、そんな自分ひとりが一生懸命交流をするよりも、不慣れだろうと多数の人が交流する方がいいということだった。今回のつどいに参加し、印象的だった韓国人団員がいる。つどいの最初には日本語も簡単な挨拶ぐらいしか分からず、言葉が出来ないから不安だと嘆いていたが、明るく積極的に交流し、日韓両国参加者みんなから愛された。そんな彼が、閉会式でつたない日本語で一生懸命スピーチをした。そんな彼を見ながら、私は「彼のような韓国人の友人がもっと増えたらいいな」と強く思った。そのために私はこれから機会を次の世代に引き継ぎ、私は交流の場の提供する側にまわるべきだと感じた。

昨年は日本から韓国に派遣され、韓国青年に歓迎して貰う立場だったが、今年は韓国から日本に派遣される韓国人団員を迎え入れる立場だった。そこで私自身の変化に気づいたことで、今年の９月、日本から韓国に派遣される日本人団員のために、韓国で行われる日韓交流会の実行委員に志願した。結果、実行委員として日韓青年達の交流の場作りに関わる機会を得た。つどいに参加していなかったら、この一歩は踏み出せていなかっただろうと思う。なにも考えず好奇心の赴くまま、ふらっと参加したつどいだったが、私自身の変化への気づき、そして挑戦する勇気の元となった。

一生の友

名前　有村　真理

Facebook でたまたまみつけた「日韓青年親善交流のつどい」。以前から存在は知っていたが昨年も一昨年も 7 月末は授業や試験があり参加できずにいた。しかし今年は韓国に交換留学中ということもあり 7 月は夏休みで、また日本に一時帰国する予定もあったためこれは参加するしかない！と思った。韓国や日本についてもっと知りたい、友達を増やしたい気持ちがあり今回の機会はどうしても逃してはいけないと思い、今回の日韓青年親善交流のつどいに応募した。

日韓青年親善交流のつどいは本当に充実していた。アイスブレイクにディスカッション、文化交流、運動会、共同制作…。最初は初めて会う日本人同士、また日本人と韓国人とで壁があったように感じたが、様々なプログラムを通して徐々に仲良くなることができた。何もかもが充実していて終わっていくにつれ「ああ、どうしてこんなに時間が足りないのだろうか」と感じることが多かった。特にディスカッションでは韓国の教育についてよく知ることができた。わたしは留学中、韓国の教育について学んでいるが韓国の教育制度については知っている前提で授業が進められてきたため、今回のディスカッションで韓国の教育制度について一から知れたことはわたしにとって大きな意味があった。

今回のつどいを通して日本韓国両青年の多くの友人を得ることができた。韓国に戻ってきてからつどいで出会った韓国青年と会ったが、とても楽しかったし、お互い心の底から思っていることを話せてうれしかった。心の底からいろんなことを話せる友人を得たのは本当に大きなことだ。これからもここで会った縁を大切にしていきたい。また、思っていたより韓国語を使えた自分に驚いたが、それでも周りには韓国語の上手な日本人、日本語が上手な韓国人がたくさんいてかなり刺激を受けた。もっと勉強して今以上に韓国語を使えるようになりたいと思った。今回のつどいに参加できたことに感謝し、これからも日韓交流を続けていきたい。